放射線医学における一層の国際的貢献，若手研究者の育成と海外進出支援に尽力

－RSNA Honorary Member　神戸大学･杉村和朗教授インタビュー－

神戸大学大学院
医学研究科内科系講座放射線医学分野

杉村　和朗 先生

【略歴】
1977年，神戸大学医学部卒業。同附属病院研修医，島根県立中央病院放射線科医員を経て，80年，高知医科大学放射線科助手。82年，神戸大学放射線科助手。87年，島根医科大学放射線部助教授。88～89年，文部省在外研究員としてカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）放射線科留学。94年，島根医科大学放射線科教授。99年，神戸大学医学部放射線科教授，2002年，同附属病院病院長補佐（卒後臨床研修担当）。2004年，同副病院長（経営担当）。2007年から同病院長。

神戸大学放射線医学分野・杉村和朗教授がRSNA 2010 Honorary Memberに選出され，学会2日目11月29日にはシカゴで行われたRSNA年次総会にて表彰状の授与が行われました。RSNA Honorary Memberは放射線医学において多大な影響を与えた研究者に対して授与されるもので，杉村教授の婦人科・泌尿器科領域における研究が高く評価されました。今回，杉村教授にご感想とRSNAの魅力などについてお話しを伺いました。

―この度のRSNA Honorary Memberご選出おめでとうございます。まずはご感想をお聞かせください。

本邦のRSNA名誉会員は，X線二重造影法を開発された白壁彦夫先生や回転断層撮影法の高橋信次先生など偉大な開発を行われた先生方がこれまで選出されています。近年RSNAでは大会長が議長を務めるインターナショナルミーティングが学会期間中に開催されており，アジア，欧州，南米など各エリアの代表者が集まり，毎年テーマを1つ決めて将来のトレンドや各国の事情，新興国での開催などが議論され，RSNAの国際化が推し進められています。現在私はAOCR（Asian Oceanian Congress of Radiology）の次期会長を務めていますが，旧知の仲である大会長のHedvig Hricak氏からも「日本の代表としてよりRSNAに貢献してほしい」と言われています。また，RSNAに初めて参加した1984年より26年間毎年演題を提出しており，このような長年にわたる国際的な活動を含め総合的に評価頂いたものと思っています。名誉会員はボードミーティングでノミネートされた者の中から1年前に決まりますが，日本の代表として全会の総意が得られたことを非常に喜ばしく思います。

大会長Hedvig Hricak氏と

今回ともにHonorary Memberになられたlain McCall氏（左から２番目）とClaude Manelfe氏（右）らと

―先生のご専門分野とそれを目指すこととなったエピソードをお聞かせください。

私はCTと共に育った世代ですが，核医学でのトレーサーによる機能診断にも興味をひかれ，また画像処理なども専門にしていました。MRIに関しては，1982年頃に近隣の病院に導入された装置を使用したのが初めてです。それまで核医学に興味があったこともあり“機能”も見ることができる優れた装置であることは知っていましたので一度使ってみたいと思ったのです。実際に使用して，革命的な装置だと衝撃を受け，これがMRIを専門に研究するきっかけとなりました。ただ当時はT2画像を８枚撮影するのに20分ほど必要でした。動きに弱く撮影領域が限定される中で，最も動きの少ない骨盤が最適だと考え，Genito-urinary Radiology（GUR）と骨転移をターゲットに決め，この領域の論文を頻繁に執筆していました。当時米国でGURの研究に精通していたのがHricak氏のおられるカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）でしたので，１年ほど同校で研究し帰国後は島根医科大学でGURを中心としたMRI診断，機能診断にフォーカスをあて研究してきました。

文部省在外研究員として留学されたカリフォルニア大学サンフランシスコ校でのCommencementにてHricak氏と

―国内外の学会でご活躍の先生から見たRSNAの魅力をお聞かせください。

当時は皆，互いに切磋琢磨し受理される演題を競う雰囲気がありました。RSNAは米国の学会でも特に有名な放射線学会ですので，一度演題を出してみようと出したら受理されたのが参加したきっかけです。限られた時間内で研究成果を発表するノウハウも学べ，日本では不十分であった教育講演も充実しており，また機器展示も規模が大きく，さまざまな面で魅力を感じました。

国や世代を越えた交流ができるのも大きな魅力の一つです。RSNAでは国内外問わず普段お会いできない先生方に会えるだけでなく，若い先生方も気軽に話しかけてくれます。私も若い頃は現地で諸先輩方に指導して頂きそれが大きな財産になっています。若い方にとってはチャンスだと思います。

―海外を目指しておられる若手研究者へ，豊富な国際経験よりアドバイスをお聞かせください。

今，日本のガラパゴス化が懸念されているように，若い方の目が余り国外に向いていません。RSNAでも従来演題数は北米以外は日本が最多であったのが現在は中国の方が多く，人口比率でみると韓国も日本より多いのが実情です。日本では海外に出なくても国内で十分新しい知識や情報を得ることができるのも原因だと思います。

しかし，国外の方との交流は人間的な幅も広がり，学問で受ける影響も大変大きいので，若いうちに国際学会で発表する機会をぜひつくってほしいと思います。苦労して作成した原稿を覚え，発表した後の達成感は格別に違います。そのような経験を早くしてほしいと思います。

また，留学もお勧めします。海外のシステムの良し悪しや，日本の良さを発見できるとともに，一生の友達もできます。モチベーションも上がりますので，本学でも国外学会での発表や留学を勧めています。

―今後の抱負をお聞かせください。

本邦の放射線医学は，二重造影法の頃より世界的に多大な貢献をしていると思います。島津さんがレントゲン発見の約１年後に国内で初めてレントゲン撮影に成功されたのをはじめ，日本は装置に関してもユニークな開発をしています。しかし，先程もお話ししたように日本全体が少し内向きになっており，ほかの産業と同様に日本の相対的な地位が下がっていると感じています。少なくともアジアではリーダーとして貢献してきており，今でも欧米に伍する力があります。これからもインターナショナルな力を発揮するようなサポートを放射線科医に行い，それにより一人でも多くの日本人が世界で認められて，夢を大きく持ってくれるよう，人を育てていきたいと思います。

―この度は誠におめでとうございました。先生のますますのご活躍を祈念しております。